

創学舎ニユース

No.234

創学舎の高校部は、六月より大学受験部と名称が変わります。

世界が敵に

まわった日(その2)

前号に引き続き、いじめられたことの傷と死の予感から。死の予感の存在が自覚されたのは、小五の体育祭であった。小五、小六の希望者のみが参加する長距離走(トラック十周)に、自分も出ようとしたその時、母と養護の先生、そして担任が私を止めた。「出るな。出たらお前は死ぬ。」一瞬、何をいわれているか分からなかった。でも、確かに母の声。その後のことは覚えていない。しかし、私は間違はなくスタートラインにいた。そして、ピストルの音とともに、私は猛ダッシュ。小五の仲間も、小六の先輩達もおき去りにし、私はぶつちぎりのトップで風を切っていた。快感、生まれて初めての快感(今思えば、私はこの快感をその後ずっと追いつけることとなる)。しかし、その快感も長くは続かなかった。五、六周すると、もう私の足は重くなり、やがて次々と抜かれていった。懸命に腕を振り、必死で走ろうとするが、体が進まない。そして、最下位に近い順位でゴール。惨めな気持ちで一杯だった。そしてもうひとつ。「出るな。

出たらお前は死ぬ。」母のあの言葉が、頭の中で鳴り響いていた。

ところでみなさんは病気や事故で死の淵から生還した人の話を聞かれたことがありだろうか?こんな話である。「お花畑があつて、そこへ行くとしたら、故人の誰かにとめられた。目がさめると、病室のベッドに横たわっていた。『いつのことは忘れたが何回かそういつ人の話を聞くうちに、自分の頭の中にも、そのお花畑』の風景がすでに存在していたことに気が付かされた。この風景は一体いつ私の頭に住みつけたのだろう。今もずっと考え続けている。やはり、小学校一年生のあの時だろうか?

さて、少年時代の私をイヤな気持ちにさせていたものも、もうひとつあった。「貧困」である。母子家庭で、加えて母も世渡り下手で収入は少なかった。当然のごとく「生活保護」を受けての暮らしであった。小学校にあがってみると、級友達の生活レベルが自分と違うことが徐々にわかってくる。私の家になにもないものが、みんなの家にある。冷蔵庫、扇風機、自転車、電気炊飯器…。また、テレビは全員の家にあるという訳ではなかったが、それ以外では、みんなの家は便利なものであふれていた。母に「買ってこれ」といえるはずもなく、がまんするしかない分かっていても、正直つらやましかった。何よりモイヤだったのは、「小林の家に がない」ということを話題にすることだった。また、私の家には、小学校三年まで風呂もなかった。近所

の親類の家に、週一三回風呂に入れてもらうために通っていた。

地区の住民の中には、私の家族に冷たい視線を浴びせる人もいた。私や弟が、道端でお菓子を食べたりしていると、「人の金で生きているくせに、ぜいたくしやがって。」と説教するおばさん。私達がプラモデルを母から買ってもらうと、「あなたは何を考えているんだ。こんなぜいたくしやがって。信じられない。」と、母を責めたおじさん。こんな場面が、年に何回かあった。おばさんやおじさんは、悪意があつた訳ではないだろうし、ひよつとしたら本人達は正義感から言葉を発していたのかもしれない。

ともかく、「ぜいたく」をしていると近所の人に思われぬように気をつけることが、いつの間にか習慣になっていた。これは、私だけではなく母や祖父、そして弟にも共通のことだった。「いじめられた記憶」「病気」「貧困」。この三つは、私の少年時代を大きく支配していた。今、こうして書けるのは、その状況からある程度脱出できたからであるが、書く理由は別にある。一体、人が自分の中の欲求や不安や怒りや劣等感などを自分で自覚し分析するのは極めて困難である。相手が家族でも親友でも、自分の悩みを正確にうち明けることはさらに困難である。ましてや、聞く方も、限られた時間の中でそれをきちんと受けとめられるかといえば、これはもう不可能に近い。私だって、今こうして書いてはいるが、本当に正しく記述しているかとい

えば、それは嘘だろう。人の心とは、人の心を知ることは、実に難しいことなのである。それでも、あえて書くのは、親子関係や友人関係、病

気、自分の性格など様々なことで子供達が、いや親達も悩んでいることを日々の仕事の中で思い知らされており、その人達へのアドバイスにはならないかもしれないが、何かのヒントが提供できればと思っているからである。出来事や事情は共有できないが、そのときに味わった気持ちは共有してもらえないかもしれないと思うからである。気持ちを共有することで、そういう人がいることで、自分の生が支えられたことを身にしみて感じているからである。

さて、話をもうそろそろ。私の中には、いつか「おとしまえをつけてやる」という衝動が芽生えていた。以下次号。(小林)

教育「名言」の紹介(9)

子どもの教育についての最悪のまちがいは、親や教師が、誤った道にさまよっている子どもらに向かつて、悪い結末を予言してやることである。

《出典》アルフレッド・アドラー(オーストリア・一八七〇—一九三七)『子どもの劣等感』

解説 いくら大人が言っても、だめ。子どもが「やる気」にならなかつたら、どうにもならない。いくら親身になって相談のり、思いを込めて説教してみても、本人が「その気」にな

らなかつたら、何もならない。では、「やる気」なる「とはどいつのことか。どいつとき、やる気になり、どいつの場合、やる気をなくしてしまつたのか。

そうした「動機づけ」について、フロイトは、過去を重視した。過去の体験が、無意識の深層に抑圧されていて、それが人々の行動を突き動かすと考えた。それに対して、アドラーは、未来の重要性を強調する。どんな目標をもっているか。どんな期待をしているのか。それによつて、今現在の行動が左右される。初めから無理とあきらめていたら、受験勉強にも力が入らない。目標が定まつたとたん、のんびり娘が、突然、見違えるように張り切り出す。そつであれば、「悪い結末」を予言するのは、そつした子どもの道を閉ざすことではないか。わざわざ、悪い方向に導くことではないか。

アドラーは、すべての子どもが、実は、なんらかの劣等感に悩まされていると言つ。小さく、弱く、価値がない。どうせ自分なんか、相手にしてもらえない。そつした劣等感とどつ向き合うか。劣等感がなくなることはあり得ない。むしろ、それを、どう使いこなすか。大人にできるのは、その手伝いでしかない。しかし、その手助けいかんで、最悪の結末を迎えてしまつこともある。子どもが、わざわざ、「悪い結果」を目指してしまつことにもなりかねない。劣等感を刺激する「脅し」によつて、人が、奮起することとはめつたにない。むしろ、「脅し」の暗示に

引つ張られて、知らないうちに、予言された「悪い結末」に落ちていつてしまつことが多いのである。

アドラーは、一八七〇年、ウィーン郊外に、ユダヤ人商人の次男として生まれた。子どもの時から、くる病や肺炎など重い病気に苦しめられ、交通事故で二度も死にそつになるなど、多難であつた。医学を修めた後、フロイトと交流を深めたが、理論上の相違から決裂し、独自に「個人心理学協会」をつくつた。その心理学は、教育の分野、とりわけ、教師養成の領域において、多くの支持者を集めた。ナチズムの台頭によつてウィーンを去つた後、アメリカに落ち着き、医学心理学の教鞭をとつたが、六七歳でスコットランドに客死した。その理論は、今日、フロイトやユングほど評価されていないが、実に大きな足跡を残した。心理療法や性格理論に関わる人たちは、それがアドラーのものと感じかねないほど、当然のよつに、その理論や用語を使っている。例えば「劣等コンプレックス」という言葉など、わざわざその名前を出すまでもなく、広く行きわたつている。

(アガトス教育研究所)

一生涯使える

英語力の育成

創学舎では、「一生涯使える英語力の育成」を

目標に英語の指導を行なつています。

そのための工夫のひとつが教科書英文テスト。英語の達人と言われる人々(同時通訳や英文科の大学教授等)の著書で共通しているのは、中学時代に中一〜三の教科書を五〇〇〜一〇〇〇回音読し全ての英文を暗唱するという勉強法です。この状態になると中間・期末テストでは毎回ほぼ満点。また彼らの中には留学経験が一度もないにもかかわらずネイティブスピーカー(英語を母国語としている人)とほぼ同等の力を示す人たちもいます。彼らの読み・書き・話す・聞くの四つの能力は、中一〜三までの教科書の暗唱がベースとなつていふのです。

我々日本人がなぜ日本語をよどみなく話せるかといえは、生まれた当初から膨大な日本語を耳から聞き取り、典型的な日本語の表現・文を頭の中にインプットし、そしてそのインプットされた日本語を自由に取り出し使いこなしているからなのです。

英語でも同様なことがいえます(その基本となるべき英文・単語・熟語は教科書の文章が最適です)。中一〜三の教科書は定期考査や受験のためだけではなく、将来英語を話したり・聞いたりするコミュニケーション能力を飛躍的に伸ばすためにも絶対に必要なものなのです。

創学舎では、授業中に教科書の英文を日本語に訳すテスト、次の回には日本語を英語に直すテストを毎回交互に実施しています。その際、まず音読をする。次にひとつひとつの単語の意

味を確認しながら英文を一文ずつ訳す練習をする。そして実際に書いて覚えるという作業を毎回宿題として全員に課しています。

また、現在授業後に中二の生徒は中一の英文を、中三の生徒は中二の英文を教科書の最初からテストをしています。これは、教科書の英文を暗記することによつて前の学年の復習をしてもつためです。また創学舎に在籍する生徒には卒業時に、中一〜三の教科書を全て暗唱できることを目標にしています。

「一生涯使える英語力の育成」のもう一つの柱は英検です。創学舎では、本年度より小学校英語を改めパスポート・ジュニアを六月より開講。来年一月に英検五級合格を目標に授業を実施します。そして五月末より各教室でパスポート五級(英検五級対策講座 全二日間)を開講。九月からはパスポート四級を開講します(来年度は三級、準二級と順次開講予定です)。

創学舎の目標は小六で五級、中一で四級(五級)、中二で三級四級、中三で準二級(三級)…。ただし()内は最低取得級となつています。六月十一日(土)には第一回英語検定試験が実施されます。塾内受験者だけで一〜二名と過去最高の人数です。英検を目標に各自の英語のレベルアップをはかりましょう。(白石)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、ご希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。